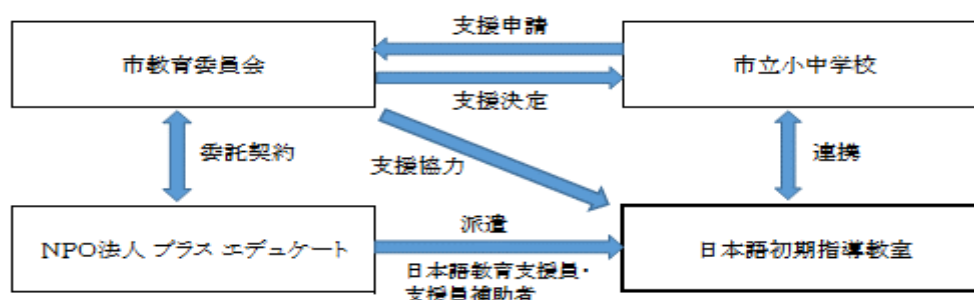


平成28年度 帰国・外国人児童生徒等教育の推進支援事業
 (Ⅱ 定住外国人の子供の就学促進事業)
 事業内容報告書の概要

都道府県・市区町村・協議会名【 碧南市 】

平成28年度に実施した取組の内容及び成果と課題

1. 事業の実施体制



NPO法人プラス・エデュケートと委託契約を締結し、日本語初期指導教室を開設した。

日本語初期指導教室と学校は、児童生徒の学習状況等について連絡調整を行い、当該児童生徒が学校生活に円滑に順応できるための連携を行った。また、指導員補助者の研修を実施した。

2. 具体的取組内容

①不就学等の外国人の子供に係る学校等との連絡調整

学校外において日本語初期指導教室を開設し、児童生徒の就学直後3ヶ月程度、在籍校の1時限目から給食の時間前までの間、日本の生活習慣や学校生活への適応を図るための日本語初期指導を実施する。給食の時間以後は在籍校に戻り、学校生活にも慣れるよう在籍校において指導を行った。

日本語初期指導教室と学校は、児童生徒の学習状況等について連絡調整を行い、当該児童生徒が学校生活に円滑に順応できるための連携を行った。

連絡調整の対象となる学校は、支援対象となる児童生徒が在籍する市内全小中学校となる。

小学校(全7校)中学校(全5校)

②学校外における、不就学等の外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導のための教室の開設

今年度は30人(延べ32人)の在籍があり、7校からの子どもを受け入れた。依頼がとて多く、予定より多くの子どもを受け入れた。

学童保育のための通所施設である児童クラブの施設(市内全7小学校に隣接して設置)を活用して、日本語初期指導教室を開設した。平成28年度は、1学期に棚尾児童クラブ、2学期に新川児童クラブ、3学期に西端児童クラブで開設した。

教室の開設場所は、保護者の送迎が見込めない場合等を考慮し、支援対象となる児童生徒の住所地に近い児童クラブでの開設を基本として、適宜開設場所を決定した。教室での指導は、日本語初期指導に実績のあるNPO法人に委託して実施した。

指導期間は、児童生徒1人当たり240時間を上限とし、1日4時間で60日、3ヶ月程度を目安とする。

指導体制としては、日本語教育支援員1名が中心となり指導を行った。今後は、支援員補助者数名を有効に活用することにより、同時に複数教室の開設を目指していく。

教室の開設時間は、在籍校の1時限目から給食の時間前までの間とし、その後、児童生徒は在籍校に戻って学校生活を送った。

③不就学等の外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導を学校外において行う指導員の研修

児童生徒への支援は日本語教育支援員と支援員補助者が行うが、支援員補助者は日本語教育に意欲・情熱はあっても日本語初期指導について経験の乏しい。そのため、日本語教育支援員が支援員補助者と一緒に児童生徒への指導を行う中で、日本語初期指導についての指導・研修を行い、支援員補助者のスキルアップを図った。

3. 成果と課題

これまでに外国人で、不登校・不就学児童生徒支援を行ってきた実績のある団体に委託をしたことで、円滑に事業を進めることができた。特に不登校の可能性があった児童については、改善が見られ、落ち着いて学校生活を営むことができるようになった。また、不登校の状態ではなかったが、日本語の理解が著しく低いことで、今後その可能性がなくなるだろうと予想された児童生徒についても、同様の効果を得ることができた。さらに、各学校の教師との連携が深まることにより、外国人児童生徒への理解が進み、きめ細やかな指導ができるようになった。

本取組を行って得られた成果

- ・日本語教育を必要とする児童生徒に対して、日本語初期指導を行うことができた。3か月間、午前中の4時間をかけてじっくりと学ぶ体制で取り組んだことで、最低限必要とされる日本語を身に付けることや、日本の生活習慣を習得することができた。
- ・指導期間最終日には日本語でのスピーチ発表会を実施し、保護者及び学校関係者も参観して成長を見届けた。児童生徒は、よりよいスピーチ発表会を目指して、意欲的に原稿づくりや発表練習に参加できた。この活動を通し、目標をもって学習する態度を身に付けることができたといえる。また、担任の配慮でスピーチを所属する学級でも実施してもらえた。これはクラスの子どもたちにどれくらい日本語が身に付いたか知ってもらうよい機会になり、また、友だち作りのきっかけにもなった。日本語初期指導での活動と学校生活を結びつけることは、参加する児童生徒の意欲的な生活態度を引き出すことに効果がある。
- ・学校の外に出ることや、同じ言語の仲間と母国語で話す機会があることは、来日して間もない参加児童生徒の気分転換や、日頃言葉が通じないことで感じているストレスを解消することにつながっている様子が見られた。

本取組を行ったところ判明した課題

- ・小学校に隣接する児童クラブを会場としたことは、安全面ではよかったが、開催地から離れた地域の学校に在籍するため送迎が必要な家庭の児童の場合は、参加を見送るしかなかった。希望するどの児童生徒も保護者の送迎に関わらず参加できる実施方法を考えていくことは、今後の課題である。次年度はこのことを解消するため、2学期は2箇所で開催する予定である。
- ・児童クラブでは床座のための机がなく、いすでの生活に慣れている外国人児童生徒には困難を伴っている。現在の会場には倉庫が無いので、日本語初期指導のための机いすを入れて使用することはできない。今後の課題である。

4. その他(今後の取組等)

- ・日本語初期指導は、できるだけ学年の早い時期に実施できると効果的であることから、小学校入学前に園児を対象として行う「プレスクール」の実施についても検討していきたいと考えている。

※ 枠は適宜広げること。(複数ページになっても差し支えない。)